

# 高校魅力化で学校存続と

広島県大崎上島町企画課

松永和樹

# 生徒の希望進路の実現を

## 高校の存続に向けた取り組みを開始

大崎上島町は、瀬戸内海のほぼ中央に位置し、芸予諸島の中にある大崎上島を中心とした複数の島々からなる自治体です。広島本土からフェリーで約三〇分、東京からも飛行機と船を乗り継いで最短二時間三〇分と、離島ながらアクセスは比較的良好です。瀬戸内海特有の温暖少雨な気候に恵まれ、柑橘類の栽培が盛んであるとともに、古くから造船業で発展してきました。しかし、現在の人口は約六八〇〇人、高齢化率は約四六パーセントと、過疎化・高齢化が進行しているため、人口減少に歯止めをかけ、町を活性化させていくことが大きな課題となっています。

高校魅力化推進事業の発端は、広島県教育委員会が平成二

六年二月に策定した「今後の県立高等学校の在り方に係る基本計画」の発表でした。同計画において、一学年一学級規模の生徒数が少ない学校は、各校が学校関係者、所在する市町及び市町教育委員会などで構成する「学校活性化地域協議会（以下、協議会）」を設置し、協議会において他校に見られない取り組みの強化などによる活性化策を検討することとされました。そして、活性化策実施後の同二九年から二年連続して生徒数八〇人未満となった場合、協議会の意見を聞いたうえで地理的条件を考慮し、「近隣の県立高校のキャンパス校へ改組」、特定の中学校と緊密な連携による一体的な学校運営を行なう「中高等学校構想への移行」「統廃合（市町立学校としての存続を含む）」のいずれかの措置が執られることとなりました。

当時、町内唯一の高等学校であった大崎海星<sup>おおさきせいせい</sup>高校は、過疎



大崎海星高校の外観。

化による若年層の減少から生徒数が減り、平成二四年度以降は全校生徒数が八〇人を超えない状況が続いていました。全域離島である本町にとって、高校があることは、当該年齢の子どもたちやその保護者の流出を抑制する意味においても、移住定住を促進する点においても重要なことです。仮に高校が廃校となれば、生徒はもちろん親御さんも含めた生産年齢人口の多くが流出する可能性があり、地域全体の衰退が加速することが懸念されました。

平成二六年度、当該計画に基づき協議会が設置されることとなり、活性化に向けた方策などに関して定期的に議論を重ねた結果、「高校の活性化は地域の活性化」のスローガンの下、町が高校存続に向けた支援を行なうことを決定し、学校の魅力を高めるためのさまざまな取り組みを開始しました。

### 高校魅力化を支える四つの柱

町では、平成二七年一〇月に策定した「大崎上島町まち・ひと・しごと総合戦略」において、大崎海星高校に対する支援を地方創生の取り組みとして位置付け、これに基づき施策を展開していきます。また、同校においても「大崎海星高校魅力化プロジェクト」推進計画を策定し、計画に基づく取り組みを進めてきました。事業内容は、大きく次の四つの柱に

分類できます。

### ① 生徒の学習環境を整える「公営塾」

町内には大学進学を目指す高校生向けの学習塾が無く、町外へ通塾するのが通例になっていました。そこで、まずは町内の学習環境を整えるため、大崎海星高校の放課後の教室を使用して公営塾「神峰学舎」を開塾しました。

大崎海星高校に入学する生徒たちは、学力の幅も広く、希望進路もさまざまです。このため、生徒それぞれにとって最適な支援を行なう必要があります。公営塾では、国語、数学、英語の学習支援に加えて、個別のカリキュラムを作成し、それにに基づき生徒が自分自身で学習する「自律学習」を促しています。講師には教科指導はもちろん、多様な経験を積んだ方を任用しています。塾生一人ひとりに対してきめ細やかなサポートをすることができ、学習支援や種々の希望進路の実現に一役買っています。

公営塾に通う生徒数は、毎年五五人前後です。近年では、国立大学への進学実績にもつながっており、今後も、大学進学を目指す生徒が町内で学びながら希望する進路を実現するために、継続した取り組みが必要です。

### ② 地域の資源を生かした「地域学」

「総合的な学習（探究）の時間」の一環として、「大崎上島学」を行なっています。



公営塾「神峰学舎」での数学の授業。

一年生時は「羅針盤学」として自分自身を知ること、自分の考えを相手に伝えることをテーマに学習を進めます。二年生時は「潮目学」として、観光案内所からの相談に応えて、新しい観光パンフレットを作成するなど、与えられた課題、地域の困りごとの解決策を考えることに取り組みます。三年生時の「航界学」では、自分で地域の課題を見つけ、その解決に向かって取り組むことを目標にします。

大崎上島のすべてを教材とした課題発見・解決型のキャリア教育は、生徒のキャリア形成のみならず、地域課題の解決にもつながっています。

### ③生徒の全国募集

町内の中学校を卒業する生徒の数は、事業開始時点では毎年四〇人程度で推移していましたが、その後、減少傾向となりました。そのため、町内の中学校生のみでは将来的に大崎海星高校の入学者数を確保していくことが困難になると考え、平成二八年度入学生より全国から生徒を受け入れることとしました。

首都圏などで学校説明会を開催するなど、生徒の全国募集を行なった結果、平成二七年度は二〇人であった入学者数は、翌年度以降三〇人前後へと増加しました。同三〇年以降は、地域・教育魅力化プラットフォーム主催の「地域みらい留学」を活用した生徒の全国募集を実施しています。



教育寮生の記念撮影。

#### ④教育寮の整備

事業開始当時（平成二八年度）は、県外（自宅からの通学が不可な地域）の生徒を受け入れるにあたっての居住先が無かったため、中国電力の協力により、大崎発電所の職員寮の一部を町が借り上げ、生徒に貸し付けできるようにしました。

その後、町が寄宿舎機能を完備した学習交流センターを整備、平成三〇年度より運営しています。寮の定員は三〇人（各学年一〇人）で、生徒の負担は、部屋代、食事代、光熱水費を含め、一カ月あたり四万円です。実際の支出額との差額については、すべて町が負担しています。現在、広島県内をはじめ、北海道から鹿児島県まで、全国各地から入寮者が集まっております。平成三二年度以降は、定員を満たす一〇人が毎年、入寮しています。

寮運営は「教育寮」のコンセプトのもと五人体制で行っており、生徒一人ひとりに対する適切な生活支援ができるように配慮しています。このため、ハウスマスターには、人柄、対人能力ともに申し分ない方を任用するほか、平日の日中は日直、夜間は宿直が勤務しています。

また、保護者の代わりとなる「島親」を対象生徒一人ひとりに配置しており、親元から離れた生活に対する支援を行なっています。



探究の時間で活動する生徒たち。

## 高校魅力化の推進で学校と町の活性化を

令和七年度より、県教育委員会が示す統廃合基準が、二年連続で「新入生が二〇人未満」、もしくは「全校生徒が六〇人未満」と緩和されるため、当面の危機は回避できる見通しになりました。しかし、地元生徒数の減少などにより、将来的に生徒数が六〇名未満になる可能性が消えることはありません。本事業では、大崎海星高校の存在の重要性和支援の必要性が認識され、町に高校を残すため、県立高校を行政が支援し

てきました。町の予算規模は年間約一億円となっており、今後は、財源の確保や予算の圧縮も検討しながら、持続可能な体制づくりを構築する必要があります。また、人材の確保について、公営塾と教育寮のスタッフは地域おこし協力隊が担っているため、任期は三年間に限定されます。このため、継続的な人材の確保が求められます。

全国では類似の高校魅力化推進事業を行なっている自治体もあります。大崎海星高校では、希望進路の実現、町内外に對するPRが生徒獲得のために重要だと考えています。高校

### —離島留学経験者からの言葉— 好きなことを地域に活かす

私は広島県庄原市出身で、大崎海星高校進学を機に大崎上島と関わるようになりました。

高校生活では地域と連携した総合的な探究の時間やプロジェクトなどが多く、自分のやりたいこと(興味・関心)を実践する場がたくさんありました。

特に印象に残っているのは、観光案内所の方と取り組んだ観光マップ作りです。対象地域の方へインタビューを行ない、設定したコンセプトをもとに自ら描いたイラストを使った地図を制作しました。完成品を見た地域の方々から「町を散歩したよ」「友人に渡した」などと言ってもらえ、結果的に人と人をつなぐ架け橋となれるようなマップを作ることができました。

また、日々の生活や授業、公営塾のイベントなどを通して地域の大人たちのお話を聞く機会も多く、さまざまなロールモデルを知ることで自分の将来について改めて考えるきっかけにもなりました。

これらの経験を通して、「好きなことを活かして誰かの役に立ちたい」という自分の軸を明確にすることができたと思います。「家(寮)と学校」の往復で終わらず、さまざまな経験ができるような教育の魅力化は、多くの高校生に自分の価値を見つける手がかりを与えてくれるはずです。

私は、大学でも地域に関することを学びたいと考え、現在は島根県立大学人間文化学部地域文化学科に在籍しています。授業ではフィールドワークがあり、アルバイトでは子どもの探究スクールで、地元の子どもたちにイラスト講座を開くなど、大学に入ってから地域との関わりを持ち続けることができています。大崎上島のように、「おかえり」と言ってもらえる場所を増やしていきたいです。

(令和4年度卒業生 永島壘依)

の存続、学校および地域の活性化のため、町では今後も同校と連携し、魅力をさらに高めていきたいと考えています。

### 松永和樹(まつながかずき)

大崎上島町企画課。平成五年広島県東広島市生まれ。平成二〇年に大崎上島に移住。広島商船高等学校を経て、広島大学経済学部卒。同二八年大崎上島町役場入職。業務の傍ら、消防団や権伝馬運営委員会事務局として地域の活動に参加。